返済

吉川　猛

私たちは人気のないレストランの出入口付近のテーブル席にいた。私たち、とは私と、さっきまで同じ研修をとなりの席で受けていた男のことだ。

人気がないのは午後三時過ぎという中途半端な時刻のせいか、それ以外の時間も客が少ないのかは不明だ。

私たちが入店してからまだ一度も開かない回転ドアの向こうに目をやった。木の枠に嵌まったガラスを通して駅とその周辺の街並みがみえた。初めて降りた駅だったが、改札を抜けるといきなり住宅街の真っ只中といった風で、たいていの駅前にみられるコンビニやファストフード店はなく、今いる『カフェ&レストランひだまり』が唯一目につく飲食店だった。

その時回転ドアがやっと開いた。今まで私の向かいに座っていた男がドアの取っ手を握り、

「ではちょっと行ってきます」

反対の手に持った携帯灰皿を私に見せると、少しだけ開けたドアのすき間に身を滑り込ませ、足取りも軽く店の外へ出ていった。

その後姿をしばらく見守った。地味なジャンパーを着た小柄な、頭頂部のつむじが拡がり始めた五十前後の男の後姿。つまり私とよく似た容貌だった。

「お待たせしました」

赤いエプロンを着けた、高校生にも見える幼い顔立ちの男がコーヒーカップを二個、ショートケーキののった皿を一個テーブルにのせた。小さな目を何度も瞬きさせると、丸刈りの伸びた頭を微かに下げてもどっていった。

私はケーキののった皿を向こうへ押した。

店内はカウンターとその周りにソファーのテーブル席があり、カラオケパブやスナックのような造りだった。そう思ってよく見ると、カウンターの奥の棚には焼酎やウイスキーをはじめ、ジンやウオッカのボトルまで並んでいた。夜はスナックに早変わりするのかもしれない。

研修、というのはマンション管理人の新人社員研修だった。第一回目の今日は座学のみで、ビデオを見ながらの学習は照明を落とした会場のあちこちからいびきが漏れたが、途中からきこえなくなった。私自身が眠りに落ちたからだ。午後からのグループワークは小学生に扮した管理会社のスタッフ相手に「お帰り！　学校どうだった？」など元気な声かけの練習に身をよじられるような疲れを覚え

た。今思い出しても、体の芯からじっとりいやな汗が湧き出る。

私はコーヒーをひと口啜った。ドアがきしみ、連れの男がもどってきた。

「タバコから帰ってきたらコーヒーが用意されてる」

満足げにそう言ってうなずくと、男はソファに深々と腰を落とした。まるで自宅の豪華なリビングでくつろいでいるような余裕が伝わってきた。

男は濁った色のジャンパーを脱ぐと畳んで横に置き、安物感漂うネルシャツの袖を肘までまくった。ソーサーの上にのった小さな銀色の容器を摘まむと、クリームをすべて注いだ。空になった容器をコーヒーに浸けると、ジャブジャブ何度か洗った。

「ほう、なるほど」

ひと口飲むと、目を細めていった。

「さて、こいつはどうかな」

ケーキの一角をフォークで切り崩しにかかった男に私は、

「ところでさっきの話ですが……」

男はビクッと手を止め、怯えたような上目遣いで私を見た。

「何ですか⁉」

私は男が席を立つ前に自分がした質問を繰り返した。

「なんだ、そのことでしたか」

ホッとした様子で口に入れたケーキを咀嚼しながら、

「私の前職は？　というご質問でしたね。どこからお話すればいいのか、まあ近年はどこにでも転がってる小遣い稼ぎばかりで、それは勘定に入れないとして、……といってもその数およそ六十～七十種、日雇いも含めると百に上るかもしれません。

そんな仕事、前田さんも経験がおありで？」

名前を言われて私はちょっと驚いた。ワークシートに書いた私の名前を見ていたのだろう。そういえば男の名前をまだ知らなかった。

「こう見えて学校はデザイン系の専門学校でしてね。学生時代は仲間内から異才とよばれるほど抜きん出た存在でして……それで卒業と同時に友人とグラフィックデザインの小さなオフィスを設立いたしました。

でもまあ、ああいった世界も、時流に乗るというか、単刀直入に申せば顧客におもねらないと立ち行かないわけで、私の性分ではどうにも」

「なるほど。商業主義に媚びることなく、自らの感性に舵を任せ大海に漕ぎ出したと……。時代が追いつかなかったのかもしれません」

メニューを見てそこに書いてあるみたいに私はいった。

遠い目をしたまま男はジャンパーのポケットを探っていた。ガラケーを取り出した。開いてボタンを押すと、私の方に画面を向けた。

升目状に区分けされた画面に色彩豊かなイラストや文字が躍動していた。一つ一つをくわしく見ると、日本古来の題材と現代的な海外のイメージが融合していた。デザインに疎い私にも横尾忠則のあからさまな影響が見て取れた。

その時カウンターの奥から怒声が響いた。いつのまに現れたのか派手な花柄セーターを着た中年女性が昭和風パーマの髪を逆立てんばかりに恐ろしい形相で小言を吐き散らしていた。その前ではさっきの高校球児風の若者がにきびの散った頬を赤くして項垂れていた。彼らの立つ背後の壁には立派な鳩時計が掛かっていた。

「そろそろ行きましょうか」

時刻が四時を過ぎてるのを見て、私はいった。

携帯画面をスクロールしていた男は聞こえなかったのか、何事か呟きながら同じ動作を続けている。

もう一度促そうと口を開きかけた時、

「わかりましたから」

撥ねつけるような音を立てて携帯を閉じた。男の顔の上を苛立ちの波が心電図のように通り過ぎた。

「行く前にもう一服」

男はジャンパーを掴み席を立った。

一人になると、ほんのひとくだりだけ聞いた男の身の上話が自然に思い出された。デザインの数々が入り乱れた色彩の氾濫として脳裏に瞬いた。それから男の顔が目に浮かんだ。

傲慢と小心が離れ離れに同居した、その中間のほどよくバランスのとれた感情をほとんど映すことのない顔。

それは私自身の顔でもあるのかもしれない。実際こうして男がいなくなってみると、つい今しがた目の前に座っていたのは幻で、私は幻相手に自問自答していたようにも思えてくる。

そういえばさっきは気づかなかったが、席に置いてあった小型のショルダーバッグもなくなっていた。男がいた痕跡は空のコーヒーカップと食べかけのショートケーキの皿だけ。

カウンター内では派手な服とパーマの中年女性が若い男の肩を励ますようにしきりに叩き、若者は小刻みにうなずき続けていた。二人とも涙ぐんでるようだった。よく見ると二人の顔はよく似ていた。親子なのかもしれない。

四時半になった。男はまだ帰ってこない。

配属されたのは高齢者の多い五階建の古い賃貸マンションだった。現場に入るとすぐに慣れ、これまで私がしてきた配管工などの肉体労働に比べはるかに快適だが、やや退屈だった。給料は安いが家賃と水道光熱費が無料のため、生活にゆとりが生まれた。管理人室を

自宅にする住み込みタイプで、時間外にも用事が出来るので大変、と噂に聞いていたが、一度救急車を呼んでほしいと頼まれた以外、今のところ想定外の用事はなかった。

勤務時間中は休憩時間以外テレビは厳禁と管理会社に言われ、「まあ多少は」と初日に同行した担当者には言われたが、観ないことにした。午前中に廊下と階段の掃除を終えると、午後は定時の巡回以外に大した仕事はなかった。それでスマホをのぞく回数が増えた。

そのメールが来た時、最初の一行で迷惑メールに分類し放置していた。借りていた金を返すという趣旨の文面で、日に何十件も届くメールのうちの一つとして、まもなく削除した。

五日後、

「信じてもらえないのは当然ですが――」

で始まるメールがなんとなく見覚えのあるアドレスから届き、

「私も昔とは違って毎日コツコツ地道に働いています」

そんな文章がチラッとみえたが、それもゴミ箱へ直行した。

さらに三日後、

「現金書留で送りたいので、住所だけでも知らせて下さい」

その後は読まなかったが、なぜかそのメールは消し忘れていた。

四回目にメールが来た時、

「懐かしいですね。また集まりたいなぁ」

短い文面のあと、写真が一枚貼り付けてあった。ガラケーで撮ったような不鮮明な画質だった。拡大するとますますぼやけたので元にもどした。数名の男女の集合写真だった。背景は観光名所や「卒業式」と立てかけた校門ではなく、ガソリンスタンドだった。

全員がブルーのツナギを着て、真っ赤な帽子を被ったり脱いだりしている。ほとんどが口を開け歯を見せ、ピースサインしてる者もいた。後列の端に見覚えのある顔があった。少なくとも十年以上前、まだ生え際が後退する前の私だった。

消し忘れていた過去のメールを開いて読み返した。

「原です。返事もらえたらうれしいのですが」

写真にもどった。一人一人の納豆大の顔を見つめた。前列にしゃがんで膝の上に肘を立て、頬杖をついているのが原らしかった。とぎれとぎれに浮かぶいくつかの記憶の欠片がだんだん集まり、ひとつの情景を作りはじめた。

およそ十年前のこと。ガソリンスタンドでのシフトが十六時からの私と十六時までの原はいつも事務所の出入口付近で「おはようございます」「おつかれさまです」を意味する、「――す」しか聞こえないあいさつを交わす仲だった。

ある日の正午前。電話が鳴った時、私はまだほとんど眠っていた。

目を閉じたまま携帯を取ると、急にスタッフに欠員が出たからなるべく早く来てほしい、と店長の声がいった。

わかりましたと答えて電話を切った。よくあることだった。私はゆっくりシャワーを浴び、わざとゆっくり食事をとったあと、部屋を出た。

スタンドに着くと、事務所でタイムカードを押した。デスクでパソコンに向かっていた店長はチラッと見上げると「サンキュー」とすぐ画面に目をもどした。時計を見ると、一時を数分回っていた。

階段を上がり、スタッフルームに入った。奥の更衣室で着替えて出てくると、一つしかないテーブルの窓際のイスに原が座っていた。赤い制帽とまだ開いてない缶コーヒーがテーブルの上にあった。

私は窓の横にある自販機の前に立ち、百円玉を入れた。ボタンを押すと当たりの出るルーレットが軽快に鳴り始めた。その音がだんだん間隔を広げていく。

「ハズレですよ。今俺が当てたから」

原がいった。浅黒い顔にとくに表情はなかった。驚いたようにギョロッと見開いた目はいつもだった。

ピーッと長い音を最後にルーレットが止まった。私は缶コーヒーを取り出し、原の前に座った。視線を避けるように窓の外を見た。寒いが天気のいい日だった。ちょうど入ってきた青いワゴン車が日差しを浴びてボンネットを輝かせていた。

「ああそうだ。よかったらあげますよ」

ユニフォームのポケットに手を入れると、握りしめた拳をテーブルにのせた。拳を開くとおしるこの缶が立っていた。大きな目が数秒間私の顔をみつめたあと、ザラザラした声で原が笑った。ホワイトニングしてしばらくたったような、あいまいな白さの歯がみえた。

私は礼をいって断った。

「やっぱり。俺も勝手に手が動いただけで」

そのあと何度か時計を見て二十九分までそこにいたことは憶えている。何を話したかは憶えていない。よく喋る男だという印象だけがその時は残った。

月曜日の管理人の仕事はゴミ置き場の整理から始まる。七時に管理人室を出て廊下をほんの数m歩き玄関脇の自転車置き場を横切ると、奥にあるゴミ集積所の扉を開く。

扉にもたれていたゴミ袋の山が中から崩れかかって、その一つが足の上にのった。半透明のポリ袋ごしに可燃ゴミに混ざってペットボトルや玉子パック、カップ麺の容器がのぞいている。

持ってきた七十ℓのゴミ袋を拡げる。ゴム手袋をはめ中身の詰まったゴミ袋から少しずつ新しい袋に移していく。得体の知れない生

き物の全身にくまなく触れていくような、さまざまな感触が指先を通り過ぎていく。乳白色の手袋にオレンジ色や暗い赤色や緑色の液体が垂れ、ネズミ色に混ざって右手全部を汚している。

分別作業をすべて終えると八時を回っていた。回収車は八時半頃に来る。膨れ上がったゴミ袋を二つずつ両手にさげ、ふたたび自転車置き場をすり抜けていく。

自転車の群れはハンドルどうしが腕を組み合うようにびっしり乱立している。やや出っ張ったママチャリの後ろの買い物カゴにゴミ袋が当たる。軽く触れただけなのに自転車はゆっくり傾いていく。あわてて脚を伸ばし止めようとするが、スタンドはすでに半分地面を離れ一台、二台倒れ、三台目でようやく止まった。

いったんゴミ袋をその場に置き、倒れたまま知恵の輪みたいに絡まりあったハンドルに苦戦してると、玄関の出入口に人影が動いた。

「おはようございます！」

会社の指導に沿って元気なあいさつを心がけている。

ダウンベストの上にショルダーバッグを斜め掛けにした背の低い若者が軽く頭を下げ近づいてきた。大学生の江口だった。

「手伝いますか？」

細い目を眠そうにこすりながらいった。

丁重に断ると、

「二日酔いだけど、語学の単位ヤバイんで」

赤い折り畳み式自転車にまたがり路地に出ると、ノロノロ走り去った。

可燃ゴミを収集場所に出し終えると、ガスメーターボックスを開け掃除用具を出した。エレベーターで五階まで上がり、廊下を掃いた。壁の段差に溜まったほこりを刷毛で落とした。それがすむと固く絞ったモップで床を拭き、雑巾で壁と窓を拭いた。元は白かったらしい床のタイルは黄色く染み付き、元は黄色かったらしい壁は茶色い卵の色に変わっていた。拭くとますます汚れが目立った。

階段を下りながら一階まで終えた。踊り場の電球が切れていたので近くのホームセンターへ買いに行き、交換すると昼前だった。

帰りがけスーパーで買った弁当を管理人室で食べていると、メール到着の音が鳴った。

ポケットからスマホを出し、画面を見た。メールは届いていなかった。別のポケットからもう一つのスマホを出した。会社から支給されたものだ。メールボックスを開くと、

『月末が近づいてますので、小口現金の清算をお願いします』

部屋の隅に置いた金庫を開け、さっき買った電球のレシートを専用の封筒に入れた。

食べ終えるとレシートの整理、出納帳の記入、差引残高と現金の

突き合わせをした。わざと時間をかけて作業したが、三十分足らずで終わってしまった。

二つのスマホをテーブルに並べて、じっとみつめる。こういう時間が最近多い。

静かだった。隣の部屋から落語の声音がさっきまで聞こえていたが、もう止んでいた。ＣＤなのか、夕方まで同じ話が何度も流れるので憶えてしまった。

上の階でしていた洗濯機の回る音が脱水に変わっている。

さらに上の方で窓の開く音がした。正午の時報みたいに長いあくびが空の方へ伸びていった。

個人のスマホを手に取り、ＬＩＮＥ、メール、電話の履歴をチェック、いつのまにか何度もそれを繰り返している。新着の通知がないからさっきと同じはずなのに、指先はアイコンに吸い寄せられる。その次はネットニュース、これもトップ記事は寒冷前線のままだった。

その時メール着信のお知らせが届いた。羽生結弦から悩みの相談だった。開かず削除した。

受信履歴のトップはまた四日前の原のメールにもどった。返信ボタンを押し、空白の文面欄にカーソルをセットする。四日間で十数回目だった。

私はまた原との過去のいきさつを思い出そうとした。

十年前、ガソリンスタンドの休憩所で初めて口をきいたあと、原とは毎日のように短い会話を交わすようになった。夕方四時前に自転車でガソリンスタンドに乗りつけると、計算機か給油機の横に立って芝生ごしに道路を見ていた原がニヤッと笑う。私は出勤時刻を早めるようになり、原も退勤後事務所から出てきた足でスタンドの敷地内に残り、しばらく立ち話をすることが多くなった。

スタッフは店長以外ほとんどが二十代だったことが三十代の原と四十代の私を結び付けたのかもしれない。店長の目に留まり、速やかに出退勤し私服でとどまらぬよう注意を受けた。

それで私のシフトが入ってない水曜日、原の仕事終わりに二人で飲みに行く約束をした。二人とも資金難のため二百八十円均一のチェーン店に行った。

店は混んでいた。入り口付近で待っていると、

「ただいま二時間制となりますが」

姿のみえない店員が声を張り上げていった。

どうする？　と原のほうをみた。

「ちょうどいいでしょう」

迷わず店の奥に進んだ。

席について飲み物の注文を終えると、私は料理のメニューを見な

から、
「このあと用事？　それとも二軒目は――」
「子供が待ってるんで。風邪気味なんですよ」
素っ気なくいった。
私はメニューから顔を上げた。
「結婚してたの？」
ちょうど来たジョッキからテーブルにこぼれた泡をナプキンで拭きながら、
「してました。四年前まで」
私はサッと切り上げて帰ろうといったように思う。原は大丈夫ですという意味のことをいったように思う。結局は店員に「お時間過ぎておりますので」と促されるまで店にいた。
毎週水曜日に飲みに行くことがルーティーンになった。会計は互いに奢り合った。原の家庭が話題に上ることはなかった。会話の途中で、
「帰らなくていいの？」
私がきくことはあった。
「まあ可愛い子には旅をさせろって言いますから」
必ずはぐらかした。それで私も言わなくなった。
そんな交流がいつまで続いたのだろう、ある時からパッタリ二人で会わなくなった。何かのきっかけがあったはずだがどうしても思い出せなかった。あの時はあの時でそれなりに楽しかったはずだが。
『一体何があったんだろう？　悪いけどすっかり忘れてしまった』
いつのまにか返信メールの本文に打ち込んでいた。懐かしさからではなかった。ヒマ過ぎたせいにちがいない。
送信ボタンを押していた。

夕方の六時になった。外では自転車の走る音や子供たちの話し声が往き来し、マンションの廊下を歩く音やレジ袋のカサカサ鳴る音が通り過ぎた。
勤務時間は八時半から十七時半だが、終わったという実感はほとんどない。住み込みである以上、時間外労働は暗黙の了解だった。
およそひと月前、初めてそれを経験した。
夜の九時頃ドアを激しく叩く音がした。インターフォンのカメラを見ると、トラフグみたいに膨張した顔が画面いっぱいに映っていた。
ドアを開けると、割烹着姿の老女が立っていた。
「どういうことですの？　ここは単身者向けの静かなマンションじゃありませんの？」
言葉遣いに良家の子女の名残があった。灰色の髪は形のよい頭を

なぞってぴったり後ろでまとめていた。割烹着は白だしで煮込んだような色合いだった。

老女は玄関の土間に片足だけグッと踏み入った。肌つやよい顔立ちは品を保ったまま、丸顔の中で両目だけが燃えたぎっていた。

私は恐る恐る発言の真意をたずねた。

夜の始まる頃、老女の隣室から男女の話し声が洩れた。ひそひそ話す声だったが、小さければ小さいほど話の中身が気になって編み物に集中できない。八時頃やっと静かになった。帰ったのかと思っていると、しばらくして押し殺した呻き声、家具の軋む音、それがだんだん大きくなってもう壁を突き破りそうな勢いだ――

「ラブホテルへ行くよう言って下さい！」

私はロッカーを開け、居住者名簿のファイルを取り出した。当の隣室の部屋番号を探してページを繰った。なかなか見つからなかった。繰りながら、老女の顔に何度も目を移した。しばらくして言った。

「わかりました。今すぐ言いに行きますから、もう安心です」

腕組みして私をにらんでいた老女は深いため息をつくと、土間を離れドアの外に足音を残していった。

足音が消えると、私はマスターキーを持ち、階段で二階へ上がった。その部屋の前に来るとインターフォンを押した。返事はなかった。鍵穴にマスターキーを差し、回し開けた。名簿どおり部屋は空っぽだった。

そんなことがあってから勤務終了の十七時半を過ぎてもどこか解放感はなく、テレビを観ていてドラマの中で電話やチャイムが鳴るとハッとスマホやカメラに目を走らせる、条件反射が身に付いてしまった。

労働は薄く長く伸びていって、端と端で手をつないだ。つまり電気を消して布団に入ってもなかなか寝付かれず、やっと意識が遠のいていった拍子にちょっとした外の物音に呼び戻される、その繰り返しで気がつくとカーテンは明るくなっていた。

就業して初めて管理会社の担当者が巡回検査する日なので、今日は朝から落ち着かなかった。七時になると廊下と階段の掃除をいつもより念入りに行った。前から気になっていた、踊り場の天井の隅に張ったクモの巣を脚立に登って取り払った。

まだ時間があったので、壁のタイルの目地にたまった黒ずみを歯ブラシとクレンザーで根気よくこすった。

管理人室を整理整頓すると、約束の十一時まであと一〇分足らずだった。電気ポットにお湯を沸かし、食器棚から湯呑とコーヒーカップを出しお盆にのせた。緑茶のティーバッグの入った缶とインス

タントコーヒーの瓶をその横に並べているとインターフォンが鳴った。

ドアを開けると、スーツを着た中肉中背の男が立っていた。年齢は多分私と同世代、短く刈った頭髪に日焼けし堅く引きしまった顔、濃い眉の下で強く光る目が浮き上がってみえた。

鋭い眼光とは裏腹に甘えたような声であいさつし、名刺を差し出した。

「先に見て回りましょうか」

廊下を指して担当者の増田はいった。カバンから書類を挟んだクリップボードを出し、ヒモに付いたペンで何か書き入れた。

廊下を歩きながら天井・壁・床に視線を走らせ、ブツブツつぶやきながら書類にチェックを入れていた。

一階から五階まで階段で上った。エレベーターで下りる間、二人とも無言だった。階層間の暗がりを通過する時、扉のガラスに二人の姿がくっきり映った。ガラスの中で目が合った。増田は天井に私は床に目を逸らした。斜め後ろからコンパクトな造りの後頭部をながめてるうち、どこかで会った気がしてきた。

一〇一号室にもどると私はキッチンに立ち、

「何飲まれます？　日本茶？　コーヒー？　粉末ですがレモンティーやココアもありますよ」

増田はカバンを探りながら、

「買ってきたんで、よかったらお好きな方をどうぞ」

短いペットボトルを二本ガスレンジの上に置いた。私は礼を言って午後の紅茶を取った。

部屋に入ると、狭いダイニングテーブルを挟み対角線上に座った。増田は親指と人差し指で〇を作り、

「この調子でＯＫ。あと表の草抜きもお願いしときますね」

電灯の下であらためて面と向かうと、一枚革のサイフみたいに滑らかだった顔の印象が少しずつ変化した。目の下の皮膚は黒ずんで半円形にたるみ、鼻の両脇はなだらかに隆起し何とか重力に耐えていた。それでもなお、見覚えのある気がした。

増田はテーブルの上で両手の指を組んだりほどいたりした。薬指の指輪が光った。シルバーとゴールドの腕時計の輪郭をなぞりながら、

「何かお困りのことは？」

「今のところ、特に」

「本当に？」

左のこめかみから顎にかけてうっすら残る傷跡を発見した時、男の顔を透かして私は高校二年時の教室を見ていた。何度席替えしても決まって最後方に座っていた何人かのうちの一人、その辺りには

いつも煙草とウイスキーの匂いが漂っていた。顔の傷は他校生との乱闘のさい、彫刻刀で切りつけられてできた。もちろん現場にいたわけじゃなく、品行方正な生徒間のうわさにすぎない。

「たとえば入居者さんからクレームが来たとします。いや、きっと来ます。そんな時どう対処するか？

まあ適当に、というと語弊がありますが、自分の職責の限りで、あくまで常識の範囲内で。言ってる意味、わかりますよね？」

さらに両耳にピアスの穴を見つけた。私の憶測は確信に変わった。

「そんなクレーマー、というか問題のある方が……」

口の中が乾き、たどたどしく私はいった。

「率直に言って問題大ありです。生活保護はまあいいとして、家賃滞納者も多くてね、当然夜逃げする輩もいます。何せ保証人不要でしょう？　身寄りもなく死なれた日には……。

うちとしても管理委託契約が期間未了なだけに続けてるものの、切れたら即撤退する方針ですよ。失礼、長々と無駄話を。あくまで会社にはオフレコで」

もちろんですといって私は笑みを浮かべた。

増田は床のカバンを膝の上にのせ、テーブルの書類を中に入れた。ほうじ茶のペットボトルを入れようとした手を止め、

「よかったらこれもどうぞ」

前に押し出した。

増田が立ち上がろうとした時、思いがけず私は、

「つかぬことを伺いますが、もしや国際高校のご卒業では？」

増田の目が一瞬光った。黒々した瞳がだんだん大きくなって、冷たい笑いのようなものにあふれた。

「私こう見えて帰国子女でして。父親がカナダに転勤になった都合で、ですから高校はケベック州の名もない公立校です。向こうではもっぱらスキー三昧、幸福な三年間でした」

増田の目がまた光った。私の上着の胸をみていた。パーカーにはモンベルのロゴが入っていた。古着屋で買ったものだ。

「前田さん、スキーはお好きで？　それとも登山？」

「どちらかといえば登山のほうで」

高校の遠足を思い出して私はいった。

『あのことをそれほど気にされていないようで心から安堵しました。十一年間ずっと胸の底にわだかまっていたので。

娘も今年成人式を迎えました。前田さんのお陰といって過言ではありません。これで私も肩の荷が下り、やっと人並みになれた気が……。あとはあのことさえ解決できれば、晴れて大人の男同士で前田さんと会えそうです』

これだけ読めば謎の近況報告だが、削除した以前の文面とつなげればおそらく理解できるのだろう。

しばらく考えたあと、結局何を言ったことにもならない一般論を私の指は打っていた。

『年を取るにつれ、たいていのことはよくあることに思えてきた。たしかに過去にはショッキングな出来事だったかもしれない。でもそんなことはその後も数えきれないほどあったよ』

検査から数日たったある日の夕方。玄関に面した受付口の小窓が急に開く音がして、大声で、

「外で誰か倒れてますよ！」

振り返ると窓は閉じ、去っていく後姿がチラッと見えた。

玄関を出て駐輪場を抜け、車一台ぎりぎり通れる幅の舗道に出た。周りには同じような老朽化した小規模マンションが立ち並んでいる。

舗道と駐輪場をへだてるフェンス沿いの数m先、側溝に半ば嵌まり込むように人がうずくまっていた。赤青黄のペンキが飛び散った模様のジャンパーですぐに大学生の江口だとわかった。

近づくとオイと声をかけ、肩を揺すった。何度も繰り返したが反応はなかった。エコバッグを提げた様々な世代の女性たちがまじまじと見つめたり、そのまま通り過ぎたりした。

膝の間に顔を埋めたまま、ようやく江口は振り絞るように、

「誰ですか？　でも放っといて下さい」

車に轢かれるからと私は江口の片腕を首に回し、背中を抱えるようにしてグッと足腰に力を込めた。空っぽの本棚みたいに軽かった。

二、三歩進んだ時、不意に江口はピクッとけいれんし、空いてる手で私を突き飛ばした。私はよろけ、道の真ん中に手をついた。

フェンスにもたれ、背中を波打たせていた江口は何度かけいれんしたあと喉を押えた。大きくひと声怪獣みたいにうめくと、開いた口から灰色の光線を吐いた。

江口の背中をさすった。灰色の粘液は赤い斑点をちりばめながら地面に広がり、きれいな円を描いた。

喋りながら近づいてきた小学生の男子三人がワッと後ろに飛びのいた。迂回して路地を渡りながらヒソヒソ話し合うと、

「わーい、今日のご飯はもんじゃ焼きだぁ～」

指差し笑いながら駆けていった。

ポケットから出したハンドタオルで口を拭きながら江口は、

「水買ってきてもらっていいですか？」

吐く息にアルコールと酢の混じった匂いがした。私は四つ角を曲がった先にある自販機へと向かった。

ペットボトルの水を買ってもどると、江口はいなかった。

マンションにもどると一番近い一〇一号室、つまり管理人室のドアに立ったまま体の前面でぺったり貼り付いてる江口がいた。
腰から垂れた長いチェーンの行方を指でたどっていた。ズボンのポケットに手を突っ込み、先に付いたカギを定まらない指先でドアに近づけた。左手も動員して必死にカギ穴に差し込もうとしていた。
「何してんの？」
ペットボトルを江口の顔に押し付け私はいった。
「ヤバイ、誰かがカギを作り変えてる！」
「部屋はあっちだよ」
私は廊下の奥を指差した。
耳に入らないのか意固地に同じ作業を続けていた。私は自分のカギを出してドアを開いた。「よかった」といって江口はそのまま転がり込んだ。すぐに部屋に上がり、そのままフローリングの上に寝転んだ。私が毛布を掛けるとすぐ眠ってしまった。
九時頃に一度、江口はふと首を起こしあたりを見回したが、頭の横にあったペットボトルを一気に半分飲むと、また頭から毛布を被った。十一時を過ぎると私は江口の横に布団を広げ、灯りを消した。

六時に目を覚ますと、江口はいなかった。毛布はきれいに折り畳まれ、部屋の隅に置かれていた。
その日の勤務時間も終えた夜の八時過ぎ、テレビを観ていると江口が部屋を訪ねてきた。今日は酔っていなかった。
「やあ昨日は迷惑かけましたね。お詫びにこれ」
左手に提げていたサントリーレッドの瓶を右手でポンと叩くと、冷蔵庫の上に置いた。
「ありがとう。悪いけど今日は飲まないよ」
フタが開いてないことを確かめると、流しの上の棚に収納した。
「さすがに僕も今日は遠慮しときます。レポートの提出が迫ってるんで、すぐに失礼しますよ」
私は食器棚からマグカップを出し、インスタントコーヒーを入れポットのお湯を注いだ。
「旅番組ですか？　最近多いっすねえ。前田さん、旅するんですか？」
なんとなく見てるだけと答えた。旅についてそれ以上話すことは二人ともなかった。
「昨日みたいに泥酔すること、よくあるの？」
真っ直ぐテレビを観ながら私はきいた。
「最近は特に」
やはりテレビを直視したまま江口が答えた。
「何か悩みでも？」
「悩みはどこにでもありますよ。ほら、ここにも」

江口はテレビ画面を顎で指した。険しい断崖絶壁とその上に立つ集落が映っていた。右上に『世界一幸せな国　ブータン』とテロップが出ていた。

「彼女、とかは？」

話題を変えてみた。

「出来ませんよ、ここに住んでる限り。こんな壁の薄いマンション」

細い目で恨めしげに私の顔を見ていった。まるで私がここに住むことを強要してるみたいに。

「確かに。でもそれならバイトを増やしてもっとましな部屋に移るとか、何らかの自助努力が必要なんじゃない？」

「そこまでする理由あります？　もちろん過去に付き合ったことはありますよ。でもね、やっぱり合わないんですよ、俺と女の子とじゃ、レベルが」

「ほう、それはまた」

私は薄い笑いを隠さなかった。

「会話のレベルが、ってこと？」

「酒を飲むレベルです」

私は黙ったまま冷ややかな笑いを保っていた。

「いや冗談じゃなく、マジで」

テーブルに身を乗り出して江口がいった。

「それぞれ自分のペースで飲めばいいんじゃないの？　相手がそれでよければ」

「だったら一人で飲むも同然じゃないですか。それにそこら辺は割りと相手に合わすタイプだし。女の子に合わせて薄い酒をまったり飲めば飲むほど、ますます醒めていく感じですよ。まあ俺と同レベルは無理でも、やや劣る位でなきゃ盛り上がれませんね」

テレビでは山小屋のような室内で、現地人とみられる男が日本の旅人に白く濁った酒を木のお椀でふるまっていた。恐る恐る口を付けた旅人が「旨い！」と叫んだ。朽ちかけた質素なお椀の上で、私と江口の視線が交わった。

「……やっぱり軽く行きますが、前田さんは？」

私は食器棚を開け、さっきのウイスキーとグラスを二つ出した。

この日を皮切りに、週に四、五回のペースで江口は管理人室を訪れるようになった。

原とのメールのやりとりはほぼ一日おきに続いていた。十年前のある時期親密に過ごしたエピソードのいくつかを思い出すまま互いに交換し合う、といった内容だった。

全体に灰色がかった人生模様にそこだけ暖色がちりばめられたような、そんな季節がなぜ突然終わったのか、なぜ十年後に連絡して

きたのか。

『あの日のことは一生背負い続ける罪として、私の中で十年間うずいてきました』

そう始まるメールで私はあの日のことを突然思い出した。簡単にいうと、あの日原は私に金を借り、そのままパッタリと私からもガソリンスタンドからも姿を消したのだった。

『幸い娘も成人し、最近やっと勤め先も見つかり、ようやく私にも経済的なゆとりが生まれました。十年もかかってしまいましたが、あの時お借りした金額にわずかながら利子を添えてお返しに行きたい、そればかり考えています。

本来は直接お会いして返済するのが筋でしょうが、とても前田さんに顔向けする勇気がもてません。

失礼ですが、現金書留でお送りしたいので、住所を教えてもらえるでしょうか？』

私は躊躇した。その日は返事を返さなかった。

思い迷った末、結局原に住所を教えた。住所とはいえあくまでも勤務地、この先長く住み続けるつもりはなく、仮の住まいにすぎないという考えに傾いて。

『明日の朝一番で送ります』

という返事だった。

次の日の夜またメールが来た。

『昨晩娘に書留のことを話したところ、ひどく怒られました。失礼にもほどがあるというのです。なるほどそうにちがいありません。

そこで意を決して直接お返しに行こうと支度していたところ、突然目まいがしてその場で倒れこみ、一歩も動けなくなってしまいました。

実は数年前に動脈瘤をわずらい、それ以来こんなことが度々起きるのです。いったんこうなると一週間から十日は寝たきりの状態が続きます。

このことを娘に伝えると「だったら私が行く」と言い出したのです。幸い明後日は土曜日で娘の仕事も休みなので、どうでしょう、明後日娘に行かせてよろしいでしょうか？』

土曜日の十七時半を過ぎたところだった。一昨日、勤務時間はその時刻までと原に伝えると、十八時に行かせると返事があった。

原と最後に会って金を貸した日、その日も我々はその頃私が住んでいたアパートの部屋で会った。同時にその日初めて原の娘とも顔を合わせた。原が手をつないで連れてきたのだった。それが何月のことだったか、もはや季節すら記憶にない。

テーブルの前に座ると、いつものように業務日誌をつけはじめた。

廊下で物音がするたび、振り向いてドアのほうを見た。日誌ははかどらなかった。時刻は十七時五十三分。

向かい側の窓際の席に移り、ドアがよく見えるようにイスをずらした。日誌は後でつけることにして閉じた。ドアの海老茶色の表面をじっと見つめながら、十年前のあの日の様子を思い起こした。

その日原から電話があった。

「実は前田さんに折り入って相談が……ここでは言えない用件なんで、今日行ってもいいですか？」

毎週恒例だった居酒屋巡りもその頃には月に一、二回で、スーパーで買ってきた酒と食料を原が持ち込み私の部屋で飲む方が多かった。そんな時の誘い文句として「大事な案件」「直近の課題」が原の常套句だった。どうせそんなことだろうと私は即座にＯＫした。

夕方ドアをノックする音がして細く開いた。いつもならすかさず土間に踏み入る原が廊下に立ったまま、顔をのぞかせていた。

「もう一人連れてきてるんで……いいですか？」

返事すると同時に原はドアの外へ顔を向け、

「じゃあ入れてもらおう」

ドアをやや広げた。

オーバーオールを着た小さな女の子が原と手をつないだまま入ってきた。おかっぱ頭の前髪のすぐ下からのぞいた目をいっぱいに開き、部屋中をみつめていた。

原が畳に上がるとやっと手を離し、しゃがんでスニーカーのマジックテープをはがした。テープはピンク色の長い耳の形で、白い側面にウサギの顔がプリントされていた。

部屋は六畳一間にキッチンとトイレしかなかった。

「お父さんたち話があるから、テレビでも見せてもらえば」

女の子は狭いキッチンを通ってテレビのある部屋の隅のほうへ、綱渡りみたいなぎこちない手足の動きで歩いていく。

「そういえば初めてでしたね。ほら、ちゃんとあいさつしないと」

女の子は立ち止まり、ほんの少し私の方へ首を曲げ、

「アキミ……です」

かすれた声でいった。テレビの真ん前にペタンと座った。

「リモコンはテレビの下にあるから勝手に点けて」

私はいった。アキミは後姿全体でうなずくと、前傾姿勢で手を伸ばした。

「いくつになったの？」

どちらにともなく私はきいた。

「これでもう九歳になりましたよ」

原が答えた。確かに九歳にしては小さすぎる気がした。どことな

く昔の子供という印象だった。デニムのオーバーオールの下のセーターも靴下もピンクだった。足の裏は黒ずんだピンクだった。
リモコンを操作していたアキミはサッと振り向き、
「来週で十歳！」
原を見ていった。
「ああそうだ」
原は畳の上のレジ袋をテーブルにのせた。テーブルは低い折り畳み式で、畳の真ん中で存在感を放つ唯一の家具だった。
「失礼して食べさせてもらおう。この子晩飯まだなんですよ」
アキミは畳に膝をついたままテーブルににじり寄った。
原がレジ袋から商品を一つずつ取り出した。ピザパン、小倉デニッシュ、紙パックの乳飲料、お手拭き。アキミは無表情に目で追っていた。
「ちょっと待って」
ピザパンの袋を開けようとするアキミを見て私はいった。
押入れを開け、小物入れの引き出しから紙の束をまるごと抜いた。カタログやパンフレット、取説書を一枚ずつめくり、宅配ピザのチラシを発見した。携帯で掛け、一番安いピザのLサイズを注文した。
「三十分以内に来るから、テレビ観ながら待ってて」
よかったなあといいながら原は商品を一つ一つレジ袋にもどした。アキミは無表情のままうなずくと、テレビの前まであとずさった。
「相談というのはこれなんですよ」
原はショルダーバッグから大きな封筒を出した。書類を二枚抜き取り、テーブルの上に並べた。一番上に「金銭消費貸借契約証書」その下に「有限会社　ジョイフル」と書いてあった。
「借りたの？」
私はきいた。
原はグッと奥歯を噛みしめるように力のこもった顔でうなずいた。
「大手からじゃなく？」
「そういう所はもう全部ダメなんですよ」
「で、俺に何をききたいの？」
「僕が数字に弱いでしょ、計算合ってるか見てもらいたいんですよ。どうも高すぎるような……。前田さん大卒だからわかるかなあって」
文系だからなあといって私は押入れを開け、小物入れから電卓を出した。契約書に書かれた元金と利息を掛け、最終弁済日までの日数で割った。
「合ってるよ」
「そうですか」
原は眉を寄せた。二人とも書類に目を落とした。
「そんなに困ってるの？」

「ええまあ、学校のほうでも何かと物入りで」
アキミが首だけ回してこっちを見ていた。すぐにテレビに顔をもどした。
「次はいつ返すの？」
言ったあと、しまったと思った。原の目が反射的に光った。
「実は明日なんです。ここ数日あちこち駆け回って頭を下げたんですが、今回ばかりはどうしようもなくて」
私は天井を見上げた。電灯が妙にまぶしかった。しばらく沈黙がつづいた。
その時ドアをノックする音がした。廊下から元気な呼び声が響いた。私は急いで立ち上がり、ドアを開けた。
スイカ色のストライプ帽の男が笑って立っていた。
私は用意していた代金を払い、四角く広がった袋を受け取った。
ドアを閉め振り向くと、サイフを手に原が立っていた。
「ここはいいよ」
「ごちそうになります」
テーブルの書類を畳に下ろし、かわりに袋から出した箱を置いた。
「来たよ」
といった。
アキミは立ち上がるとズボンのしわを引っぱり、両手で髪を整えるしぐさをしてテーブルの前に座った。
私は箱を開けた。ラテン系の陽気な曲が突然流れてきたみたいに、派手な匂いが立ちこめた。
アキミは膝の上に両手をのせたまま、しばらくじっとしていた。黄色と赤と緑が踊る円盤に吸い寄せられるように顔を近づけた。細長い目が丸くなった。
「お父さん、これは何？」
ピザを見つめたままいった。
「お前の好きなパンとだいたい同じ味で、もっと美味しいものだよ」
原がいった。「ピザも知らないんですよ」弱々しく笑った。
私は冷蔵庫を開け、コーラのペットボトルからグラスに注ぎアキミの前に置いた。コーラをしまう時、缶ビールを二本出した。
「いえ、そんな身分じゃないんで」
原は顔の前で手を振った。私は二本とも冷蔵庫にもどした。
「食べれるだけ食べていいからね」
私がいっても、アキミはじっとしていた。
「お父さんまだまだ話があるから、先に食べといて」
原がいうと、アキミは一瞬だけ合わせた手をサッとピザに伸ばした。扇形のひと切れをつまみ上げると、伸びたチーズをもう片方の手であわてて千切って上にのせ、先の方からグッと口に押し込んだ。

齧り取った残りの断片をかざしながら、丸々と膨れた浅黒い頬を動かしていた。血色の悪い唇にふざけて口紅を塗ったみたいに赤いソースが垂れていた。

「さっきの続きですが……」

原は借用書を指で押さえ、微かに私のほうにずらした。

「今回だけ、何とかお願いできませんか」

「無理言うなよ」

声を低めて私はいった。電卓の表示する「七八〇〇〇」という数字を見ながら。

「給料日には耳をそろえて返すんで」

「返したあとどうする、生活費は？」

原は封筒から別の書類や通帳を出し、児童扶養手当などいくつかの入金予定を事細かに説明した。

ふと見ると、ピザは四分の一なくなっていた。残る四分の三をアキミはじっくり眺めていた。

「好きなだけ食べていいよ、僕たちお腹空いてないから」

実際食欲は失せていた。

「せっかくだから遠慮するな」

膝の上のアキミの手が最短距離でピザに走った、百人一首を取るみたいに。

それから部屋の片隅の畳の上に場所を移し、私と原の押し問答はつづいた。途中「もうお腹一杯」というアキミの声がきこえたが、二人とも答えなかった。原の上体はだんだん畳に近づいていった。とうとう正座し、両手を畳に突いていた。

いつのまにかテレビは消えていた。アキミは冷蔵庫の前に立っていた。扉には水道屋が郵便受けに入れる磁石のシールが何枚か貼ってあった。剥がした一枚を両手にはさみ、じっとにらんでいた。

「好きなのがあれば持って帰っていいよ」

私はいった。

「うちにはめったに入らなくて。管理人が厳しいんで」

アキミはシールを一枚ずつ両手に持ち、畳に座った。二枚のシールをテーブルにのせて見比べた。ハローキティと黄緑色のカエルのイラストがそれぞれ描かれていた。

「サンリオのキャラクターが好きなの？」

玄関のスニーカーを指差し私はいった。アキミは目を上げ初めて私の顔を見ると、黙ってうなずいた。

いつまでも二枚のシールを見比べていた。七時を過ぎ八時を過ぎるとその顔はだんだん揺れながらテーブルに近づいていった。

九時を回り、アキミの額にシールが貼り付いた頃、私は部屋の隅の金庫を開けていた。それは母親の形見の品で、支払うべき諸経費

を支払日までにその中に用意しておくのも、いわば形見の習慣だった。

銀行の薄緑色の封筒を四枚出した。封筒をすべて逆さにして小銭を出し、水道光熱費の入った三枚から札を抜いた。ポケットのサイフからも札をすべて抜いた。家賃の入った封筒にそれを入れ、原の前に置いた。原は畳に額を押し付けたあと、ジャンパーの内ポケットにそれを入れた。アキミのそばに寄り、

「そろそろ帰るよ。家で寝よう」

言い終わる前にアキミはビクッと肩を震わせ、テーブルから顔を上げた。額からシールが落ちた。拾ってもう一度見ると、二枚そろえて手の中に握った。

ピザの箱はフタが閉まっていた。開けると、ちょうど半円形に残っていた。フタを閉じ、ピザ屋の袋にもどし、

「明日の朝にでも」

原に渡した。

「じゃあ遠慮なく」

冷え切った笑いを浮かべ原がいった。

靴をはき、手をつなぐと原は深々と一礼したあと、

「月末には必ず」

ドアを開け二人で出ていった。ドアが閉じた。

一分もしないうち、ほんの少しドアが開いた。ピンクのセーターの腕がすき間から伸び、ドアの真ん中辺りで止まった。すぐにまた腕はスルスルとドアの外へ這い出していった。覗き穴のすぐ下に、黄緑色のカエルの顔があった。ドアが閉まった。

ドアが開いた。水道屋のシールはもうなかった。夕日が射し込み、玄関の辺りはそこだけ昼下がりみたいに明るくなった。

入ってきたのはパーカーのフードを被ってる以外とくに目立った特徴のない女性だった。一七〇cm足らずの身長、やや猫背の痩せても太ってもいない体形、紺のパーカーに紺のジーンズ、見たところピンクの配色はなかった。

肩からバッグを外すと、フードを脱いだ。

「遅くなりました」

頭を下げていった。

約十年。遅くなったとひと口にいっても。だがそれは私の感傷にすぎないのかもしれない。現実にはたったひと言でしか言えないのかもしれない。

「二十五分も遅れてしまって」

腕時計をみてアキミはいった。私は声を出して笑っていた。

「気にするほどじゃないよ」

まあどうぞといって向かいのイスを示した。
アキミは座ると大きな布製バッグのフタをはね上げ、中身を探った。マスクで隠れた顔は半分しか見えず、見える半分にもふと思い起こさせる造作や表情はなかった。確かなのはおかっぱでなく、かなり長い髪を後ろで束ねていることだった。
カバンから取り出した封筒をテーブルの上に置くと、アキミはもう一度頭を下げた。封筒は現金書留用で、受取人欄に私の住所と名前が書いてあった。差出人は住所の途中まで書いて横線二本で消されていた。糊付けされてなかった。開けると、数枚の紙幣といっしょに四つ折りにした便箋が入っていた。
『無事娘から受け取ってもらえましたか？
あの時前田さんが貸してくれたのは八万一千円でした。今では何の証拠も残っておりませんが、間違いありません。わずかばかりの利息と合わせて、切りのいい金十万円をお返しします。
返したからといって、前田さんへの恩は永久に返せるものではありません』
私は立って部屋の隅へ行き、母の形見の金庫にそれをしまった。
席にもどると、しばらく沈黙がつづいた。アキミは卓上カレンダーのアイガー北壁を見ていた。管理会社の増田が置いていったものだ。
「静かでいいところですね」
ぽつりといった。私はうなずいた。
「元気にしてた？」
数週間ぶりに会ったような口調でいってみた。
「ちょっと風邪気味ですが、元気といえば元気です」
そんな風に差し障りのない質疑応答のみで何時間にも思える何分かが過ぎたあと、
「ではいつかまた」
アキミは帰っていった。時計を見ると十八時四十分だった。

数日後原からメールが来た。
『先日はお時間を割いて頂きありがとうございました。娘に失礼はなかったでしょうか？　親のしつけが行き届かず、前田さんが不快な思いをされたのではと、今になって憂慮しております。
私のほうはあいかわらず目まいのする日が続き、最近ではトイレに行くのがやっと、先行きの見通しが立たない状態です。
仕事のほうは契約社員でもあり、期間満了まで一年余りであることから、思い切って退職し回復するまで生活保護のお世話になることを決心しました。
そのため娘との同居を解消せねばならず、転居先を探していたと

ころ幸い近所に手頃なアパートを見つけ、いざ契約の段になり保証人として私の名前を記入、受給者証のコピーを提出したところ、失格となってしまいました。

他に保証人を頼める縁故もなく、保証人不要の物件では娘が年頃でもあり親としてセキュリティに不安が募ります。

先日何気なく前田さんの勤務先のマンションをネットで閲覧していたところ、保証人不要で空室あり家賃も格安とのこと、娘もあそこならとすっかり決まった気でおります。

私としても前田さんが管理人なら安心して娘を送り出せます。お会いになってわかるとおり、ちょっと変わった所のある子ですので、他の住民の方々とトラブルを起こさぬよう、何分ご指導のほどお頼み申します』

その月も二十五日を過ぎた日曜日の夕方、アキミは引っ越してきた。

その日最後の見回りを終えて管理人室にもどると、まもなく大学生の江口がドアを開けた。左手に第三のビールの六缶パック、右手にペットボトルのジンを提げていた。

「どうします、今日は。軽くいきます？　それとも重く？」

「成り行きに任せよう」

私は冷蔵庫を開け、炭酸があるのを確かめた。冷凍庫を開けると製氷皿をひねり、落ちてきた氷をとなりの容器に受け、製氷皿に水を張った。

ビールからジンソーダに移る頃、インターフォンが鳴った。モニターを見た。

「どうぞ、開いてるよ」

ドアを細く開け、アキミが顔をのぞかせた。マスクが汗で顔に貼り付いていた。

「今到着しました」

息も絶え絶えにいった。

私は立ってドアを全開にした。廊下の上に大きなボストンバッグとキャリーバッグが大小二台あった。

「トラックはもう来てるの？」

たずねると私は江口を呼んだ。

ハンドタオルで額の汗を拭きながらアキミは、

「トラック？」

かん高い声でいった。

「ああ、ご心配なく。荷物はこれだけです」

江口がボストンバッグを肩に掛け、私がキャリーバッグを引いて三人でエレベーターに乗り込んだ。ブザーが鳴った。アキミは下り

て階段へ向かった。
五〇三号室に荷物を運び入れたあと江口を紹介し、二人で飲んでるから歓迎会も兼ねてよかったらと軽く誘ってみた。アキミはあいまいにうなずいた。
二人で部屋にもどると、江口はトイレに行き、私は来客用のグラスを出しておいた。ドアが開いた。トイレから出てきた江口はアキミを見て短く叫んだ。
「お待たせしました」
三者面談みたいに三人同時に席についた。
「片づけとかいいんすか？」
江口がきいた。
「お気になさらず。それより氷をもらっても？」
私が立つより先にアキミは冷蔵庫まで行って冷凍庫を開けた。
もどると炭酸とジンを注ぎ、人差し指で氷を混ぜた。濡れた指先を顔に近づけようとして「あっ」マスクをずらし指先を舐めた。
乾杯といってさあ飲もうとした時、「ああそうだ」パーカーのポケットから小さなガラスのビンを出した。
「肝臓が弱いもので。明日も仕事ですし」
薄橙色の錠剤を二粒手のひらにのせ、ジンソーダで飲んだ。マスクをずらした細長い顔にもやはり思い当たるふしはなかった。口の周りから頬にかけてマスクの形にそこだけ白かった。
それが気になったのか江口が、
「仕事って、外でする仕事すか？」
「外でやることもあります。ビラ配りとか、カンバンを持って立ったり」
私はチラッと江口の目をみた。
「じゃあ中では？」
「遊んだりおしゃべりしたり、本を読み聞かせたり……まあ色々ですね」
「もしかして保育園？」
「そんなようなところです」
江口は何か言いかけたが止め、「ああなるほど」というとそれきり口をつぐんだ。私はなぜかホッとした。
気づまりな空気が漂っていた。私も江口もひんぱんにグラスに口を付けた。アキミは気にする風もなく、ポテトチップスとジンソーダをコンスタントに口に運んでいた。
だがよく見ると指先が微かに震えていた。グラスを持つたび、氷がカチカチと音を立てた。
私はテレビを点けた。笑い声が沸き起こった。
「いつもは何を観てるの？　そういえば昔……」

「テレビは観なくなりました。全然観ないから、売ってしまいました」

「ヒマな時はどうやって時間を？」

久しぶりに江口が口を開いた。

「借りてきたマンガを読んだり。近所に貸本屋があったので。気分が沈みがちな時は音楽を聴いたり、ラジオ深夜便をつけたり」

おそらくは「音楽」の「オ」と発音したきり、江口はなぜかそのあとを飲み込んだ。敏感に聞きつけたアキミは、

「アッ音楽ですか？　音楽はですねー、新しいものはもうひとつピンと来なくて、わかるかわからないかわかりませんが、どう言うんだろう、たとえばですねー、国でいえば――」

言いながら思い出そうとするように目を細めた。やがて完全に目を閉じた。急にガクンと前にのめり、その瞬間パチッと目を開けた。

「疲れのせいか一杯で酔いが回ったようです。今日のところはお先に失礼します」

グラスを持って立ち、流しの中に置くとそのまま出ていった。

また二人きりで飲み始めた。何事もなかったようにテレビを観て笑い、それについてコメントした。

合間合間に江口はアキミのことをきいた。私はほとんど知らないと答えた。

「年はいくつくらいでしょう」

「同じくらいじゃない」

持っていたポテトチップスで江口を指していった。

「女の知り合いは多いほうですが、ああいうタイプは初めてです」

それからまたテレビを観て笑った。

とはいえその十五分余りの印象で、アキミのことを風変りだとか世間離れしていると判断するのは不当なことだ。そう自分に言い聞かせた。だがそれ以外の判断材料といって、十年前を含めても彼女について私が知っているのは二、三の事柄にすぎなかった。

いずれにせよ私にとってもこれまで他によく似た人に会ったことのない、興味深い人物だった。

だから毎朝玄関前やゴミ集積所を掃除する時、アキミと顔を合わせることをどこかで期待していた。

ところがその週が終わり、次の日曜日になっても会うことはなかった。毎朝見かけるのは江口のほか、数少ない中年の男女、コンビニに新聞やパンを買いに行く老人たちだった。

短くて強い印象はもともと夢によく似ているが、時間がたつにつれますます現実味を失い、たちまち薄れていった。

ある日の午後、昼食の準備をしていると玄関に面したガラスの小

窓をコツコツ叩く音がした。子供がよくいたずらするので振り向くことなく電子レンジへ向かい、汁なし担々麺を取り出した。
凹みのない平らなガラスを外側から無理矢理滑らす音がして、
「ただいまです」
アキミの声がした。
「お帰り。どこかへ泊りで行ってたの？」
それには答えず、何度かうなずいていた。
袋から麺を取り出して皿に移し、見るともう窓の向こうからアキミは消えていた。
麦茶のポットを冷蔵庫から出し、グラスといっしょにテーブルに並べた時、ドアをノックする音がし、
「お邪魔します」
アキミが入ってきた。
「疲れましたね」
靴を脱いでリビングまで来ると、この前と同じイスに座った。片手でグラスを傾けるしぐさをし、
「よかったらお伴しますよ」
目を細めていった。笑ってるのかもしれないが、あいかわらず表情は読めなかった。
私は食器棚からグラスをもう一つ出した。
「これが酒にみえる？　ヒマそうに見えるだろうけど、勤務時間中は一応真面目にやってるよ」
「みたいですね。遠慮なくどうぞ」
汁なし担々麺を横目でみていった。
食べ始めると、アキミはクルッとこちらに背を向け脚を組んだ。私はなるべく音を立てないように食べた。アキミの背中の裏側で空気のもれる音がした。
「冷凍パスタかチャーハンならあるけど」
「帰って食べますから」
なるべく早く食べ終わろうとした。麺をすする大きな音を立ててしまった。
「ソースの飛び跳ねにお気をつけて。白いと目立ちますから」
背を向けたままアキミはいった。私のシャツは黒だった。
やっと空いた皿をシンクに下げ、水を張った。
麦茶を飲みながら私は、
「そういえばこれは決して悪口じゃなく、ただ気になったからきくんだけど」
「何でもどうぞ」
向き直ってアキミがいった。
「すごく気に入ってその服を着てるの？　それとも職場のユニフォ

ームか何か？」

これまで会った三回とも同じパーカー、同じケミカルウオッシュのジーンズを見て私はいった。

「これしか着たくないので。まあ言うなればこだわりですね」

私は黙っていた。

「いやいや、ちゃんと洗ってますって。同じものを二着ずつ持ってますから。ところで」

何かを決意したように両手をテーブルに置き、立ち上がった。

「冷凍パスタって、何味があります？」

この時初めて、目の前の若い女が十年前の少女と同一人物にちがいないと私は悟った。

ある日のこと、アキミはおそらく彼女にしかできない素晴らしいことをした。以下の記述は彼女自身の証言をなるべく忠実に再現したものだ。

『今朝私は十時過ぎに目が覚めました（昨日の夜残業で帰りが遅かったので）お腹が空いてたのでローソンへパンを買いに行きました。運悪く私がいつも買うイチゴとマーガリンのコッペはなく、私はそれしか食べたくないので、何も買わずに帰ってきました。

部屋にもどるとじっと座って待っていました。何を、って五一八号室の福井のおばあちゃんをです。おばあちゃんとは廊下ですれ違った時のあいさつから始まり、だんだん仲良くなったのです。最近では毎朝七時から八時の間に大福やお饅頭を届けてくれます。

今日は私が出てこないので、きっとあきらめて帰ったのでしょう。十一時まで待ってみました。いつもならもらったお菓子は会社に持っていき三時に食べるのであきらめればいいのですが、今日はがまんできません。今すぐ甘いものをお腹に入れたい。

厚かましいと思いつつ、部屋を訪ねてみようと五一八号室へ向かいました。ふと見ると、階段で何かが光っています。スーパードライの缶です。それが何本も階段の上に、下の階まで落ちてコロコロまだ転がってるのもあります。近づくと、大きなネズミみたいな灰色の塊が落ちていました。

もっと近づくとおばあちゃんでした。くの字に折り曲げた両腕を下敷きにして、うつぶせに寝ていました。踊り場の上では大きめのレジ袋が風に揺れていました。

そのあとどうなったのかよく覚えてないのですが、私はおばあちゃんの足のほうを持って五一八号室へ運んでいました』

頭のほうを持っていたのは私だった。その日二回目の巡回で通りかかると、廊下の端にアキミがしゃがんでいた。驚いたことに老婆の口に口を付けていた。

「何してるの？」
「人工呼吸です。学校の保健体育の授業で習いました」
私は脈をとった。動いていた。
彼女によると発見した時たしかに心肺停止の状態だったというが、彼女の思い過ごしかどうか定かではない。
電話で救急車を呼び、そのあと大家と管理会社の増田に電話した。
夕方になって増田が来た。私は騒動のあらましを記した日誌を見せた。
「困りますねえ、勝手なことされちゃ」
読みながら増田がいった。
「はい、すみません」
「前田さんじゃなくて、この住民ですよ。何かあったらすぐ前田さんに連絡する、前田さんが私に連絡する、緊急の場合は前田さんの判断に任せる。徹底してもらわないと困りますよ」
私を自分の膝を見ていた。
「とまあ、あなたに言ってもらちが明かないんだが。
それはさておき、これを」
カバンから黒い塊を二つ、テーブルに置いた。黒いストラップに鋭く尖った黒い金属が付いていた。
「これは？」
「昔使ってたもので失礼ですが、もしよかったら」
「何に使います？」
増田は一瞬だらんと口を開けた。
「またまた～。そろそろ必要でしょ。雪山は危ないですよ、アイゼンがないと」
登山好きだったことをすっかり忘れていた。
その時コンコンとドアをノックする音がして、アキミが顔をのぞかせた。
「アッ」
といってすぐ閉じた。一瞬見えた左手の袋、その中の缶ビールがまだはっきりそこに見えるようだった。
「今のは？」
増田がきいた。
「５０２号室の住民ですよ」
こともなげに私はいった。左手が死角になっていたことを祈った。
「もしかして、さっきの？」
私は目の動きだけで肯いた。
「何しに？」
「さあ」
「ここへはよく？」

「それほどでも」
増田はアイゼンの一つを握ると、金属の尖端を指でなぞり始めた。
聞こえるか聞こえないかの低い声で、
「信頼関係を築けっつーの、べたべたした関係じゃねえんだよ」
アイゼンの尖った刃でテーブルをコツコツ叩き始めた。

また原からメールが来た。
『その後娘の様子はどうでしょうか？　迷惑をかけていないでしょうか？　なにしろ人と違うところが多々あるので、周りの方達とうまくやっていけてるか心配でなりません。満足な躾をしてこなかった親の責任です。
ところでそれとは別に、また新たな問題が持ち上がりました。私のほうはあいかわらず体調がすぐれず、そういう意味では取り立てておお知らせすることもないのですが、問題というのはいつも私の身の回りの世話をしてくれている、アパートの同じ階に住む女性が急に引っ越すことになったのです。
よく手作りのお惣菜や果物を届けて下さる、私にとってなくてはならぬ方なのです。
そこでまた、今からするお話も急なことで前田さんには申し訳ありません。
女性が出ていった後の部屋に、娘を住まわせてもかまいませんか？
引っ越しの手伝いもして下さったときいて誠に心苦しいのですが、お恥ずかしい話、風呂トイレに行くのがやっとの状態、食事も徒歩一分のコンビニまでカートにつかまり一〇分以上かけてたどり着くありさまです。
実はもう、アパートには手を打ったのです。来月の頭から入れます。ですから今月末にはそちらを退去することになります。
このことについて、娘は何か言いませんか？　言わないでしょうね。あの子の性格では、おそらく最後の日になってひとこと言うか言わないかでしょう。
短い間ですがお世話になりました。私が復調しましたら、親子ともどもきっとお礼に伺います』

それからまた何日間かアキミの顔を見ない日が続いたあと、急にフラッと管理人室を訪れては雑談していく、そのローテーションを繰り返した。話というのは、その日街で見かけた可笑しな看板や通行人の様子、ラジオで聴いた視聴者のハガキについてがすべてだった。
一つ一つの逸話は奇妙に鮮やかなイメージを描いた。だが帰った

あと思い返してみると、つまり彼女の話し方や身振り手振りを抜きに振り返ると、大して興味を引かれないありふれたエピソードにすぎなかった。

そのまま三十一日になった。その日は資源ゴミの回収日だった。六時過ぎに集積所へ行くと、元のベージュが所々に残る鉄さび色のキルティングコートを着た男がうずくまっていた。アルミ缶とペットボトルが混じったゴミ袋からアルミ缶を選り分けていた。あちこち破れ、汚れて中身の見えない自分用のゴミ袋に移していた。移す前、缶を振り音が鳴ると口を付けた。

私に気づくと、特にあわてた様子もなく野球帽を深く被りなおし、堂々と顔を上げて私とすれちがった。フェンスに立てかけた、空き缶で膨れ上がった袋をいたるところにくくり付けた自転車に乗ると、ゆったりペダルを踏み走り去った。

変わったことといえばそれだけだった。その後いつものとおり玄関周りと廊下の掃除、郵便ポストのチラシ類の整理、日に四度の巡回を済ませた。

十七時半になると管理人室にカギを掛け、近所のスーパーへ行った。

生ハムサラダ、中華総菜セット、上握り十貫パック、スパークリングワイン、特選スイーツコーナーからは苺のスフレを買った。部屋にもどるとすべて冷蔵庫に入れた。

テーブルの前に座り、テレビを点けた。

十八時を回っていた。食器棚から皿と箸とグラスを三セットずつ出し、テーブルの端に置いた。することは他になかった。

十八時半になると立ち上がった。すぐにまた座り直した。

十九時になるとまた立ち上がった。今度は玄関の靴脱ぎ場の前まで行った。引き返して座ると、グッとイスを引いた。

二十時を過ぎ、冷蔵庫からビールの缶を出したり戻したりしていた頃、インターフォンが鳴った。ドアが少しだけ開き、廊下のコンクリートがザラザラ擦れる音がした。黒いキャリーバッグが侵入してきた。

私は立って靴箱の前にそれを立てかけた。続いてやってきたもう一台もその横に並べた。

アキミは大きく息をつくと肩からボストンバッグを外し、流し台の前にドサッと下ろした。

「バスは十二時前までであります」

といった。

座っといてといって私は廊下に出、一〇五号室のインターフォンを鳴らした。三度押したが、江口は出なかった。

管理人室にもどると、冷蔵庫からスーパーでの買い物をスイーツ

以外出し、中華総菜セットだけ電子レンジに入れると、一つ一つテーブルに並べた。
「どうしたんですか？」
テーブルから目をそらしたままアキミがいった。
「給料日は大体いつもこんな感じ」
二人は座った。アキミはマスクを外した。
私はスパークリングワインのボトルの首を握った。
「私に開けさせて下さい」
自分のほうに引き寄せると右手でボトルの口をふさぎ、ニヤニヤ笑いながら尖端を私のほうへ向けた。
「残念ながらコルクじゃないよ」
「なんだ」
フィルムをむき、キャップを回した。
グラスに注ぎ、
「じゃあ」
「いただきます」
グラスをぶつけ、飲もうとした。
「また忘れてた」
パーカーのポケットからガラス瓶を取り出した。
「飲んでみればわかりますけど、朝の目覚めが全然ちがうんですよ」
二粒出して口に入れた。
「試してみます？」
私は丸めた手の平を差し出した。
アキミがトイレに立ったので、私はもう一度江口の部屋の前まで行った。やはり留守だった。
もどるとアキミは玉子の握りの玉子だけ先に食べていた。
会話は弾まなかった。アキミは黙々と飲み食いしていた。いつもの快活さはなく、左目と右目が別のものを見てるような違和感が目元に漂っていた。頬だけは今までどおり赤くなっていた。
そんな空気が私にも乗り移ったのか、駆け足で酔いが回ってきた。箸を握ったつもりが指から力が抜け、床に落ちた。拾おうとテーブルの下に潜り込んだ時、アキミの足が目に留まった。
白い靴下で、先が二つに割れ親指だけ別だった。指の入る布地はピンクで、白い甲にはウサギの目鼻口があった。
「まだ好きだったの？　サンリオグッズ」
壊れやすいものにふれるように私はいった。
「そう、たまたま百均で見つけたから」
右頬だけ丸く膨らませ口を動かしながら、アキミがいった。
「それよりずっと気になってたんです、子供の頃から」
ハッと私は顔を上げた。一瞬だけ酔いが覚めた。

「どうしてあの時溺れなかったんですか？　海の中に入ったのに」
頬からさっきまでの赤みが消えていた。去年のクリスマスみたいに色あせていた。
「あの時って？」
「大昔ですよ。もしかして酔いました？　さっきからずっと日本の昔話のことを話してるじゃない」
体じゅうの酔いが一気に頭に逆流したようだった。私はテーブルに肘をついた。
「昔話って、浦島太郎とか？」
テーブルクロスの格子模様をみつめながら、はるか上空からアキミの声が流れるのを聞いた。
「一寸法師ですよ。お椀の舟なんて片足をのせただけで沈んじゃうでしょ」
「小さな男の子だから、小指くらい小さな」
私は自分の小指を見た。それはみるみる伸びて先が見えなくなった。気がつくとテーブルに頬を沈めていた。
「それは桃太郎ですよ。だって普通サイズの男の子だったら重くてキジが飛べないじゃない。キジに乗っていくんでしょ、鬼退治に」
真っ暗な夜空に巨大な白い鳥が飛んでいた。白い草原みたいにざわめく背中の羽毛に、少年と猿と犬が必死にしがみついていた。
背中にひたひたと冷気がしみ込んできた。床に横たわっているんだなとわかった。
壁の時計は暗くてはっきり見えない。じっと目をこらした。二時四〇分頃だった。アキミはバスに乗れただろうか。起きて布団を敷こうと思った。手足がびくともしない。金縛りのようだった。
それにしてもひどい息苦しさだった。まるでマスクを何枚も重ねてるような、口からはまるで呼吸できず、かろうじて鼻に細い風が通っていた。
金縛りは何度か経験してるから、あわてることはなかった。こんな時は全身にグッと力をこめ、手足に巻き付いた見えない縄を断ち切ろうとすること。そうすれば長くても二〜三分、短い時は数秒でスッとほどける。
ほどけない。外側へ向け力を集中させればさせるほど、ピッタリ貼り付いた手首と足首どうしはグニャリとした弾力に押し戻されてしまう。
わずかに動く首をねじ曲げ、手足を見た。常夜灯の薄暗い照明のなかでよく見えないが、本当に縄が巻かれているようだ。いや、縄よりもっと太くて白いもの、養生テープにそっくりなものがぐるぐる巻きにされていた。
目のすぐ下にも白いものが横断していた。口を開け、舌を出して

みた。舌の先がゴキブリホイホイにかかったようにぺったり何かに貼り付いた。

微かにドアのきしむ音がした。滑るようにひっそりした動きで頑丈なブーツのシルエットが私の顔のすぐそばをよぎった。そのあとにスニーカーが続いた。

四本の脚は部屋の隅で止まった。金庫のまわりを囲んでいた。金庫がフッと宙に浮かんだ。ゆらゆら揺れながら、人魂みたいに寝ている私の横を飛んでいく。

スニーカーの影がまた顔のすぐ横に来た。足首のまわりに短い靴下の布地がわずかにのぞいた。私は目を閉じた。

部屋じゅうが霊に取り憑かれたみたいにギシギシ音をたてていた。うっすら目を開けた。テーブルが消えていた。また目を閉じて、開けた。キャビネットのあった場所に驚くほど広い床がみえた。もう一度目を閉じた。

長い時間がたった。そのうちに耐えがたい息苦しさは、身も心もとろける心地よさに変わってきた。うっとり私は目を開いた。

カーテンのなくなった窓から、透明な明け方の光が射し込みはじめた。集中治療室のように真っ白な壁に囲まれた、何もない部屋で私は寝ていた。